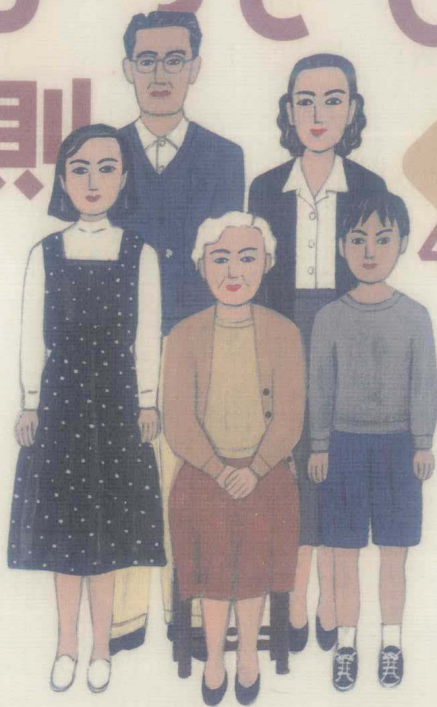


「家族の幸せ」 ちよつとした 法則

人生って
素晴らしい!
ことがわかる
47の妙薬



畑
正憲
||
編

「家族の幸せ」 ちょっとした 法則



人生って
素晴らしい!
ことがわかる
47の妙薬

畑 正憲 = 編

講談社

■編者略歴

畑 正憲(はた・まさのり)

動物文学者、エッセイスト。

一九三五年、福岡市生まれ。

東京大学理学部、同大大学院修了後、動物記録映画の制作にたずさわる。六七年「われら動物みな兄弟」で日本エッセイストクラブ賞受賞。

六八年退職後、北海道へ移住し、中標津町に動物農場「ムツゴロウ動物王国」を建設。映画、テレビ、執筆活動を通して動物と人間のふれあいを描き続ける。七七年、菊池寛賞受賞。

なお、ムツゴロウとは有明湾に棲むハゼの一種で、その容貌が畑氏に似ているところから、氏の愛称になった。

「家族の幸せ」^{かぞく しあわせ} ちょっととした法則^{ほうそく} 人生つて素晴らしい! ことがわかる47の妙薬

一九九五年十月二十六日 第一刷発行

編者——畑^{はた}正憲^{まさのり}

装画——峰岸 達

装幀——鈴木成一デザイン室

©KIRIN FUKUSHI ZAIDAN 1995, Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二一〇一 郵便番号一〇二一〇一

電話 編集〇三—五九五—三五九 販売〇三—五九五—三六五 製作〇三—五九五—三六五

印刷所——慶昌堂印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは生活文化第三出版部あてにお願いいたします。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-06-207923-2 (生活文化第三)

序章 時代の肖像

畑はた
正憲まさのり

都市生活者が増えるに従って家族制度が崩壊し、家族とは何だろうという想いが、人びとの喉元に未消化のままひっかかっている。都市が膨張し、未来の明るさを擱んだと信じた時代には、たとえばニューヨークで生まれる文学などには、家族など不要だという思想が色濃く投影されていた。

しかし、最近、事情がちよつと変わってきた。純愛とか、家族とか、忘れようと努めていたテーマが作品の中心に据えられるようになってきている。

緑濃きオアシスの村を後にし、砂漠に足を踏み入れた旅人が、白い光のあやなす鮮烈な風景に最初は感動し、やがて疲れて、再び村へと帰ってきた感じがしないでもない。

人と人のつながりとは何だろう。

夫婦。親と子。

これ以上切り離せないという最小の単位の中で、人はそのつながりを味わい、おかしさや有難さや哀しさを反芻している。私は、地球上がどんなに変化しても、人は家族にこだわり続けて生きると思う。それどころか、最も古くさ

いように見えていて、実は、最も新鮮で、最も大切なことになっていくのではないだろうか。人類の生活が激変するので、家族は常に風雨にさらされ、常に新しくならなければならないからだ。その意味で家族は、最も現代的な問題だと言える。

さて、家族についての手記を読み進む内に、私は文章のよさに瞠目した。簡潔で、しかも勘どころを押さえていて、記述が具体的であった。日本語が乱れているとか、テレビ文化のさばり、日本人が文章を書けなくなつたという批判を聞かされていたので、驚きもしたし、みんな、こんなに巧いのだと、心をひきしめもした。

誰でも、一生の内、一つは小説を書けるとは、古くから言われていることだが、これからは、こう改めた方がいいかもしれない。

誰でも、一生の内、いくつかはエッセイを書ける、と。

家族は最も身近な存在だから、見る目が確かである。しかし、空想の産物で

はなく、事実に基づくノンフィクションだから、胸をうつ意外性もあった。

涙が湯船の中に落ちる。(76ページ・子供とお風呂に入った日)

はげた頭に落ちる涙も描かれていた。どんな感じがするのだろうか。私は自分の頭に、誰かに涙を落として貰もらいたくなかった。冷たいのか。生なま温あたたかいのか。

(84ページ・愛の涙に支えられた命)

半身不随の祖母がポータブルトイレに座る。その横で祖父が、いきなり「あかとんぼ」を歌い始める。その歌いつぷりは、「こぶしのまわった大声」と表現されている。(33ページ・あかとんぼ)

たったそれだけの描写で、読者には、歌っている老人の姿が浮かんでくる。口の開け具合、眼光、頑がんと固こものだが、社長とか町内会長とかちよつとだけ偉い人にへいこらし、器用なようできて実は端はたから見れば武骨ぶこつさが目立つ人柄が想像出来る。

微笑を絶やさぬ 肝きもつ玉かあさん”は、私たちをほっとさせてくれる。(29ページ・小春日和のような久美ちゃん)

ドロ棒の靴をはいてしまった夫は、一生、そのことを笑われるだろう。(20
ページ・泥棒とオンボロ靴)

長生きの時代だから、五十歳を過ぎて第二の人生が始まったりする。絵に手を染め、展覧会まで開いたりする。恵まれた、倅しあわせな人生だなと私は思う。

(57ページ・母の転機)

暖かい家族の所へは、サン、タ、ク、ロ、ースならぬ、ヨ、ン、タ、だ、つ、て、や、つ、て、く、る。

(148ページ・ヨンタさん)

靴下をぶら下げておけばプレゼントが入れてあるだつて？ 何という西洋かぶれのお伽話ときばなしを流行はやらせるんだ！

子を持つ貧乏な父親が、胸の内でもつぶつぶ独り言を言つて怒っている。しかし、サンタがこなくて傷ついているわが子を見ると、とたんに切なくなり、必死の思いでパチンコ屋へと出かけていく。かつては、仕事上のウサを晴らすために玉をはじいたのだが、その夜は違う。一つ一つに切ない思いがこめられているので、玉は生きもののように動いて、穴に自分からとびこんでいく。

その間の微妙な心のゆれ動きをとらえた父親の文章は見事だった。

私にも、似たような思い出がある。

娘は、保育園に通っていた。新年には、友だちが遊びにくることになつていった。

だが、見事に金がないのである。

年の暮れ、妻は私に五百円渡した。

「これで、何とかしてくれる？」

「ようしきた」

私は、金を受け取った。

頑張つて、ギャンブルで百倍以上にしたのだけど、帰路、勝った金が内ポケットで重く、一刻も早く帰りつきたいと思つたことが本当になつかしい。

自殺未遂の経験がある父を励ます、娘の知恵はいじらしい。(108ページ・ハン

カチ)

喫茶店から花屋へと、伝言とメモで導かれていく。ハイヤーまで用意すると

は、なんとという頭のいい娘さんなのだろう。

愛を伝える方法は、この世に百万も千万もある。普通の生活でそれを忘れてしまっているのは、あまりにも一所懸命生きていて、余裕がないからだと恥づかしくなる。

私には、ドンファンドンファンの友人がいる。

彼には常に、とびきり美人のガールフレンドが後を絶たず、ある作家の奥さんが彼の胸倉むなぐらをつかまえ、

「どうしてなのよ。どうして、そんなにモテるのよ。白状なさい、手口を！」と迫るのを見たことがある。

ある日、彼が席を立った時、当時のガールフレンドがこう言った。

「わたし、風邪かぜをひいてたの。そしたら彼って、京都にいたんだけど、東京まで、深夜タクシーをとばして来てくれたのよ」

女性の心を射かとめるには、マメでなければならぬとはよく言われることだが、それだけでは不充分であり、常識を打ち破ってしまう表現のし方が雄弁ゆうべんに

愛を語るのである。

頭髪のすくなさを嘆く父親に、自分の髪の毛をプレゼントする娘もまさに常識を超えていて、私だってその子を抱きしめたくなくなってしまふ。(112ページ・お父さんの髪の毛)

病気は、それを背負いこんだ個人にも、またまわりにいる家族にとっても大事件である。ある意味では、湾岸戦争よりも重い出来事かもしれない。

悲惨で、残酷である。この世に、どうしても病気なんてあるのかと恨みたくなくなる。重度の障害児を抱え、死のうと思つた母親さえいるのだ。

しかし、皆、けなげに闘っている。今日は楽しかったねと、笑っている。

家族だからこそと、私は拍手を贈りたい。一人では生きられないけれど、二人、三人になれば、雄々しく運命に立ち向かえるのだ。

家族の中には、いろいろな人が含まれている。ぼけ老人がいたりする。ドジでトンマな父親がいる。オナラの大きな母がいる。

家族の中だからこそ、リラックスし、外では見せない姿をさらけ出す。

ここに文を寄せてくれた方々は、そのような家族の表情を、涙でちよつと湿った目で眺め、愛情のこもった筆づかいで活写してくれている。

家族の在り方は、時代と共に変わっていくものだし、たくさんの人の筆で綴ったこの本は、時代の肖像になっている。

人というものは、ウン、おかしなものだ。

ウン、いとしいものだ、ウン。

いいものなんだ、ウン、不可思議なものなんだ、ウン。

私は何度も何度も頷きつつ、何度も読み返して朝を迎えた。

「家族の幸せ」ちよつとした法則◎目次

序章 時代の肖像

畑 正憲

第一章 夫婦の法則*か細い赤い糸は、風雪に耐えて強い絆に

泥棒とオンボロ靴 20

五木への旅 24

小春日和のような久美ちゃん 29

あかとんぼ 33

二百万円の絵 37

子供の前の夫婦喧嘩 42

第二章 母性の法則*しなやかで、したたかな知恵

看護婦になる妻 48

おんぶと給食 53

母の転機 57

オナラに込めた母の想い 61

二人の筆跡 65

大晦日の牛乳配達 69

第三章 逆境を生き抜く法則*地獄からしか見えない天国がある

子供とお風呂に入った日 76

輝いている娘 81

愛の涙に支えられた命 84

たくまのお食初め 89

裕子からのメッセージ 94

『障害児の母』という肩書 98

あれから五年 102

第四章 父と娘の法則*永遠の恋人であり続けるために

ハンカチ 108

お父さんの髪の毛 112

雨または曇り、時には晴れ 117

災い転じて福の神 121

神様のいたずら 126

第五章 父と息子の法則*男が乗り越えるべき最初の壁

キリマンジャロの絆 132

三冊のヌード写真集 136

嗚呼！ 我が息子 140

明治の時計職人 144

ヨンタさん 148

父の汗 152